ヘロヘロさんと41人のメイドたち

satoari

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

社畜人生から一転、スライムは４１人のメイドに囲まれる。
４１人のメイドたちの創造主の一角、ヘロヘロさんがログインしました。
更新遅め、オリジナルメイドがちょこちょこ出ます。
▶？当作品は支部で更新しているものを修正しつつ投稿しています。
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｓｅｒｉｅｓ．ｐｈｐ？ｉｄ＝６２７１４５

目次

蝸牛の目覚め ―― 1
分岐点にて ―― 9
姦しい宝石 ―― 31

蝸牛の目覚め

身体が重い。暖かい砂の中に埋もれているかのように、その境界線が不明瞭だ。久しぶりに熟睡したようだが、最後に身体がこんなに鈍るほど眠ったのはいつだったか……。強張った身体を思いっきり伸ばし、ぐにゃぐにゃにほぐそうとした。直後。

「……寝すぎた……!?」

胸を突き上げるような衝撃と、どっと吹き出す冷汗。時計を見ずとも、身体で寝坊したことを直感する。やはり遅くまでユグドラシルをしていたのがまずかったか、仕事は始発に乗らないと間に合わないと、と思考がぐるぐると渦巻き、嘔吐きそうになる。慌てて身体を起こし、ベッドから転げ落ちそうになる。身についた社畜の習慣が体を突き動かす。

が、突如世界の回転が止まり、焦りが霧散する。精神がすとんと落ち着き、まるで凪のように静まる。——同時に周りを見渡すだけの余裕が生まれる。

「ここは……?」

自室の薄暗い白色灯ではなく、柔らかいシャンデリアの灯りが其処彼処の装飾に反射している。ほどよい弾力で体を受け止めているのは安物のボロのマットレスではなく、広いベッドだ。自分の周囲は柔らかい白のカーテンに包まれている。――こういうベッドを天蓋付きというんだったか。明らかに１ＤＫの自室とは違う場所だが、何故か覚えがある。いや、それよりも……

「なんでこんなに……見えるんだ？」

人間に目で捉えることができる範囲には限りがある。人間の目は前方にあるのだから、当然だ。

その範囲が異様に広い。正面は特に違和感もなく認識できる。が、それだけではとどまらず、前方６０。、９０。だけではない。霞んだようにだが、自分の真後ろが視認できている。――首を捻ることなく、自分の真後ろに果実の籠が描かれた静物画が掛けてあるのが分かる。恐ろしいことに、視界の外のものでも焦点を合わせるとくっきりと見ることが出来る。まるで身体全体を使って見ているようだ。ぞっとするような感覚のはずなのに、やけに心が覚めきっているのがますます不気味だ。まるでそうあるのが当然であるかのように、この異変を受け入れてしまっている。

「俺は……どうしたんだっけ。確かユグドラシルに……最後の日にログインして、そして」

昨晩の出来事のはずなのに随分前のことのように感じる。寝起きのせいもあるだろうが、頭が回らない。やけにぼんやりとしている。身体も重たく、ふわふわとした所在無さを感じる。酒を飲んだ時と風邪状態がないまぜになって、軽くなったような、ぶよぶよふわふわした状態だ。遅刻しそうだとか、突然豪奢な場所で目を覚ましたとか、そんな焦りもまるで他人事にしか感じられない。酒を飲んだ覚えはない。ＤＭＭＯを疲れたまま遊んで、酔っているのだろうか。

（――過去には『３Ｄ酔い』という言葉があったそうだが、ＤＭＭＯでリアルな体感をしても、実際には体はその体験をしていない。五感の体感と体の体感の相違が『ＤＭＭＯ酔い』の原因と言われているとかなんとか。）

突然、控えめなノックの音が思考を破る。返事をしようと口を開く前に、大きな扉が開けられた。

白と黒にふんわりとしたフリル。メイドだ。まごうことなきメイド。それもとびきり綺麗なメイドさんが現れた。まるで絵の世界から抜け出てきたような、可憐でかわいいメイド。

それを非日常的と思うより前に、彼女が誰なのかを思い出す。彼女に費やした時間はとても長く、辛くも楽しい時間だったから。

「……シクスス？」

がしゃんと音をたて、銀器が落ちる。

ああそうだまぎれもない。かつての仲間の姿が思い出される。大味のキャラ設定はなかったものの、素朴で明るく、嫌みなところがない彼女のキャラメイクを自分は気に入っていた。

そう、彼女は作られた存在だ。

落ちた水差しが絨毯を濡らしていくが、シクススは凍りついたかのように動かない。やがて大きく見開かれた金眼から、ぼろりと大粒の雫がこぼれる。

「……ヘロヘロ、さまぁ……」

美しい顔がくしゃりとなり、堰を切ったようにぼろぼろと涙が溢れる。

今、自分はユグドラシルにいる――ＮＰＣであり、自身とその仲間たちが作った存在、シクススを前に、ヘロヘロはようやく自分の状況にようやく気付いた。

「な、え、あっ……その、大丈夫……？」

予想もしないところで目覚めた混乱もあったが、目の前で女性が泣いているという事態が、ヘロヘロの頭から『より重大な問題』を押し出してしまう。

泣きじゃくるシクススのもとにたどり着こうとして、身体に違和感を覚える。紫の粘液に覆われた不定形の身体。間違いなく、古き漆黒の粘体（エルダー・ブラック・ウーズ）―ユグドラシルでの己の姿で

ある。よくよく思い出せば、豪華な部屋もかつて仲間たちと作り上げた仮想の自室ではないか。ならば今、自分はユグドラシルにログインしていることは間違いないわけだが。

「あれ?でもサービス終了したんじゃ?」

なんらかの理由でサービスが延期したのだろうか。それならば納得できないわけではない。ＤＭＭＯのシステムはプレイヤーに五感を感じさせるもので、プレイヤーの神経にも多くの影響を与える。何処かのＤＭＭＯでは通信障害で何人かのプレイヤーが気を失い、社会問題になったことがある。おそらく終了間近にまでログインしていたところ、気を失うか記憶が混乱する何かがあったのか。

なんにせよ、このＮＰＣシクススがいて、この部屋にこの姿でいることは、ユグドラシルでしかありえないことだ。

――それではこの違和感はなんなのだろうか。

その正体に気付く前に、廊下から息をのむ声と、さざめきが起こる。

「シクスス!何、今の……ええ!?」

「へ……ヘロヘロ様!?」

音を聞きつけて来たのか、扉の前に白黒フリルの麗しいメイド達が集まりだす。どれもこれも皆美しく、そしてヘロヘロには覚えのあるＮＰＣたちだ。

「こ、これは……一体……」

「ひぐっ、う、よ、よがったです、ヘロヘロさまぁ～～！」

ふらふらと歩み寄ってきたシクススの頬は赤く、目もハレぼったい。ぼろぼろと溢れる涙がぽとんとヘロヘロに落ち、そのまま表面を滑るように落ちる。

――生きている。

涙で濡れた表情、溢れた涙を指で拭う動き。鼻が詰まったような声。緻密すぎる挙動はかつてのものとは比べ物にもならない。呆然とシクススの顔を見つめていると、ヘロヘロの視線に気づいたのか、シクススはおろおろと辺りを見渡し、恥じ入ったように俯く。

自分がかつて、そうあれと造った通りの動き。

「シクスス……お前、一体……」

突然、メイド達の騒めきが更に大きくなった。

「あなた達、何をしているの！至高なる御方のお部屋ですよ！」

夜会巻きのメイド。眼鏡のフレームにはレンズはなく、その奥で知的そうな瞳が見開かれる。

「ヘロヘロ様!?お、目覚めになりましたか！あ、あなた達！本当に下がりなさい！至高の御方が……ちょ、ちょっと！僕を押すのはやめて！」

が、眼鏡のメイドの言葉も虚しく、気がつけば周りを何人ものメイド達に取り囲まれてしまう。押し出されたメイドがこめかみに指を当て何か喋るも、すぐに他のメイドたちに隠れて見えなくなる。

「おかえりなさいませ！ヘロヘロ様！」

「私達の偉大なる造物主！」

「何……？ほんとになにこれ??」

目が覚めれば（スライムの体になったとはいえ）豪華な部屋で、何人もの美しいメイド達に囲まれ、歓声と涙で迎えられているこの状況。ゲームの世界とは思えない、リアルに感じられる夢のようなこの世界。

「なるほどー……ユグドラシルじゃなくって、俺、ひょっとして死んじゃったんですかね。」

「ヘロヘロさん！」

突然の声に鞭打たれたように、メイド達が一斉に立ち上がり、身を引き首を垂れる。まるで波が割れるように道が開く。

白と黒の間から、黒い影が現れる。

その姿は昨日見たばかりのはずなのに、とても懐かしく、まるてかつての旧友に出会ったように覚える。

「おはようございます、ヘロヘロさん」
　長いローブを纏い、暗い眼窩には赤い光が揺らめいている。黒いオーラは後光のようにも見え、禍々しい気配を湛えている。そんな恐ろしいオーバーロードの姿に似つかない、優しく慈しむような声。
「も、モモンガさん……ですよね？これは一体……」
　オーバーロード―モモンガは頷くと、辺りを指し示すように手を開く。
「ようこそ、ナザリック地下大墳墓へ。お目覚めをお待ちしておりました、ヘロヘロさん。」
　すると、まるで統率されているかのようにメイドたちが顔を上げる。
「おかえりなさいませ！我らが造物主！」

「……とりあえず、遅刻は考えなくていいですかね。」
　間の抜けたヘロヘロの呟きはメイドの耳に聞こえることはなかった。

分岐点にて

◆

「えっ」

「いやっ、その……すみません、わがままを言ってしまいました。ヘロヘロさん、どうかゆっくり休んでくださいね。」

まさにヘロヘロがログアウトのボタンに触れようとしたとき、モモンガからその言葉が投げかけられた。

瞬間、ヘロヘロはなんとも言えない気持ちに襲われた。まるで夕方の公園で一人項垂れている子供を見つけてしまったような、雨に打たれる子犬を見つけてしまったような——悪く言えば面倒ごとを押し付けられたような状況。きっと見過ごせば後味が悪いことになるな、とは思う。

呼び止めた当のモモンガは笑顔のエモーションマークを出し、取り繕うように手を振っている。画面の向こうでは一体どんな顔をしているのか。

「……いいですけど、おれ多分寝落ちしちゃいますよー？」
「あはは、はい、おやすみなさい……って、え？」
　コンソールを閉じてモモンガを見つめる。ぽかんとこちらを見返す骸骨が可笑しくて、思わず微笑んでしまう。
「途中で返事しなくなったら、寝てるって思ってくださいねー」
　結局、面倒事の方を選んでしまった。ここのところ残業ばかりで、自宅に帰って眠るのも久しぶりだ。貴重な布団での睡眠を逃してしまうことになるだろう。それでも、モモンガのアバター越しでも分かる喜びようにそれも許してしまえる。
「本当ですか！よかった……！はは、俺一人で過ごすのも、ちょっと寂しくて。」
「ああ、そうですよね……今日は他に、誰かログインされましたか？」
「っ……あ、あんまり、皆都合が合わなくて」
　モモンガの返答が詰まったのを聞いて、ヘロヘロは思わず顔を顰めてしまう。アバターに表情が現れないのが救いだろう。あまり良くない話題に触れてしまったようだ。

　自分も多忙で、なかなかユグドラシルで遊ぶ時間がなく、ここのところは疎遠になっていた。ギルドに在籍はしていたものの、最後にログインしたのは随分と前だ。そう、少なくとも1年以上は経過しているかもしれない。その間ギルドで何があったか、ヘロ

ヘロには知る由もない。

ヘロヘロはモモンガに悟られないよう、他プレイヤーからは不可視のコンソールを開いてギルドメンバーの一覧を開く。最後にログインしたメンバーから上から順に表示される仕様だ。

「……あ」

だが、そのリストを覗いて思わず絶句する。

「４人……」

４１人。それだけの人数を揃え、異業種のみの稀有な集団でありながら強豪ギルドの名を馳せた時代の面影もない。自分とモモンガ以外の二人も、最終ログインはかなり昔のことだ。

空っぽのギルドメンバー一覧の上にあるのは『２９位』の表示。かつての栄光から比べれば凋落と言えるかもしれない。しかし実質一人ぼっちのギルドが最終日とはいえ、この順位にいることの意味をヘロヘロは理解している。

いや、意味は分かれど、モモンガにここまでギルドを維持させてきた物は理解できない。一体何に突き動かされて、ここまで続けることが出来たのか。ヘロヘロは静かにコンソールを閉じた。

「……ギルド長」

「どうしました、ヘロヘロさん？」
「せっかくの最終日ですし、ナザリックの中でも見ていきましょうか。時間は限られてますから、９階層から１０階層までですけど。」
「！……そう、ですね。うん、そうしましょう！」
　名残惜しそうに立ち上がったモモンガはヘロヘロの方へ向き直る。先程の言葉通り、まだ他のギルドメンバーを待つつもりだったのだろうか。この残り３０分の間に、もう何週間もログインしていないメンバーが来るとでも思っているのか。
　急に広々とした円卓が、更に大きく空虚なものに感じられた。
「じゃ、いきましょうかー」
「はい、それでは……」
　しかし立ち上がったモモンガが歩き出さずに、すぐに立ち止まる。
「モモンガさん？」
「ああ、いえ。これももう、懐かしいなぁって」
　モモンガの目の前にあるのは、黄金に輝く物々しい錫杖。ギルド武器、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンだ。
「あー、なんだかこれもこうして見るのは久しぶりな気がします。」
「武器として使う機会はあまりなかったですからね。懐かしいなぁ……たっち・みーさ

んとか、奥さんと喧嘩してまでログインしてくれたっけ。」
「そうなんですか。ぷにっと萌えさんのおかげで、かなり効率よく集めらめた気がします。」
「そうそう、それでせっかく集めた資材を誰かが…るし★ふぁーさんだったかな、勝手に変な装備作るのに使って大ゲンカになったって…あれもあの時は怒ったけど、今じゃ懐かしいな。」
　懐かしそうに呟くモモンガを見て、ヘロヘロもしばし憧憬にひたる。仲間たちと共通の目的に向かって未知の世界を駆け抜けたのは、今思えばとても充実した日々だった。きっと、ナザリック地下大墳墓を制圧した後より駆け出しの頃が一番楽しかったかもしれない。
　しかし、スタッフがギルドの要でありながら、すっかり思い出の品となっていたことに驚かされる。
「そういえばモモンガさんって、これ、装備したことほとんどないんじゃないですか?」
　ユグドラシルにおいてギルド武器はギルドの命そのものと言える。絶大な力を得る代わりに、破壊されればギルドが崩壊することとなるため、不用意に持ち出されることはまずない。

「そうですね、完成時にみんなで記念写真を撮った時以来ですかね。」
「……せっかくモモンガさんに合わせて作ってあるんですし、装備していきませんか？」
「えっ？……いえ、やっぱり皆さんで作ったものですから！オレが勝手に持っていくわけにはいきません。」
モモンガは大慌てで首を振る。嘘だ、と思う。きっとモモンガ自身、身につけてみたくて仕方なかったのかもしれない。
誰もがキャラメイクに気合を入れた、一癖も二癖もあるメンバーばかりだった――そうでもなければ、異業種など選ばないのだから。
そんなメンバーが自分の為に作った武器を装備したいと思わなかったはずがない。この拒否は、最後まで多数決によるギルドの意思を重んじたモモンガの誠実さ故だろう。
「こんなときまで遠慮しなくてもいいじゃないですか。みんなで作ったからこそ、最後くらい使った方がいいですよ。おれもちゃんと装備されてるところ見てみたいですし。」
ヘロヘロの言葉に促され、モモンガはじっとスタッフを見つめている。
「……メンバーみんなでモモンガさんに似合うように作ったんです。みんなもきっと、

モモンガさんが装備した方が嬉しいですよー」
本当のところはどうかは分からない。けれど、アインズ・ウール・ゴウンをたった一人で、ここまで守り続けた男にはその権利があるのではないか。例え残された時間がわずか半刻の間だとしても。
「はは……実はオレも、折角最後なんだし、装備してもいいかなって。」
振り返り照れ臭そうに笑うモモンガを見てヘロヘロもまた微笑む。
「いいんですよー。さ、ここでそうびしていくかい?」
「一体いつの時代のネタですか。」
モモンガはゆっくりと手をスタッフへと差し伸べる。すると、ふわりと浮き上がったスタッフは吸い込まれるようにモモンガの右手に収まる。
突如、杖から禍々しい苦悶の顔を浮かべたオーラが浮かびあがる。赤いオーラはしばらくスタッフに纏わりつくと、まるで煙のように崩れて掻き消える。スタッフに付与された外装データのエフェクトのうちの一つだ。
「……作り込み、こだわりすぎ。」
二人で顔を見合わせると、どちらからともなく笑いが漏れ出す。こうして誰かと冗談を言って笑いあったのは一体いつぶりだろうか。
「折角だし、装備も最高装備に変えようかな。」

「おー、いいですねー。モモンガさんの魔王感がますます高まりますね。」
「ヘロヘロさんも装備、変えられたらよかったですね。」
「いーえー、スライム種はこのままが勝負服ですから。」
　冗談を言い合いながらも、モモンガは次々と装備を変えていく。ローブから指輪まで、一つ一つが豪華な作りであり、そしてステータスも秀逸なものばかりだ。装備を終えると、そこには禍々しいオーラを纏った”死の支配者”がいた。
「どうでしょうか？似合います？」
　モモンガが右掌をかざし何かを掴むように指を曲げると、その掌に不気味な紫の炎が燃え上がる。まるで火の玉を捕まえているようにも見え、その姿は人の魂を掴む死神そのものだ。
「うお……」
「？」
「かっこいいですよ、モモンガさん！すごく様になってますよ！本当に悪の大魔王って感じで！」
「本当ですか！ふふふ、こんなのとかどうでしょう！」
　モモンガは次々とエフェクトが派手なスキルを使用してみせる。実際ステータスも上がっているのだが、何せ作り込んだ外装だ。強さよりもアバターの格好良さに「男心」

が大はしゃぎしている。
「それじゃあ、準備は出来ましたね。どこにいきましょうか？９階のロイヤルスイートもいいですし、いっそ地上でモンスター狩りして、試し打ちでもします？」
「いえ、その時間はないかもですね……あ、それだったら、最後に行きたい場所があるんですけど、どうですか？」

◆

第９階層に広がるのは白く美しい、幻想的でさえある巨大な城だ。リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを使えばあっという間に着くはずの道をわざわざ歩いているのは、ただの通路ですら今の二人には一つの思い出の品に感じられたからだ。
建築物を作るのにこだわっていたギルドメンバーたちが懐かしい。シャンデリアの落とす煌めく光と、それを反射する大理石の輝きの中を歩いているうちに、次第に二人の口数は少なくなっていく。代わりに思考が過去へと逆行する。
ヘロヘロにとってこの第９階層はもっとも馴染み深い場所でもある。ヘロヘロはユグドラシルで戦闘や探索以外の時間のほとんどをこの第９階層で、他のメンバーと過ごすことが多かった。

広い通路をいくつか曲がると、その理由が姿を現した。美しく長い金髪に、緻密な刺繍が施された白いエプロン、とても従者の品とは思えない上質な黒のメイド服。ナザリック地下大墳墓に存在する四十一人いるメイドにうちの一人、名前は確か、リュスィオールだったか。

こちらに向かっていたリュスィオールは、二人の姿を見ると静かに通路の端に身を引き、深く一礼する。

「……そっか、まだちゃんとここにいたんだ。」

まるで昔遊んでいたぬいぐるみがひょっこり顔を出したような、懐かしくもどこか胸が締め付けられるような気持ちに襲われる――とても大切にしてきたはずなのに、いつの間にか頭から抜け落としてしまっていたものを見つけた気分だ。

立ち止まったヘロヘロの隣に並び立ったモモンガもじっとメイドを見つめる。

「確かナザリックにいるメイドたちはヘロヘロさんとホワイトブリムさんとク・ドゥ・グラースさんが作ったんですよね。」

「そうですねー、俺だけじゃ４１人分のプログラムはちょっと大変で、結局他の同業者さんにも手伝ってもらいましたけど。」

転職する前、まだユグドラシルで遊ぶだけの時間があったころ。『せっかくＮＰＣを配置できるようになったのだから、ギルドメンバー全員分のメイドを作ろう』と無茶苦

茶を言ってきたのは、重度のメイド愛好家、ホワイトブリムだった。
　ホワイトブリムのメイドに対しての思い入れが尋常ではなく、ちょうどその頃人工ＡＩを勉強していて興味があるという、軽い気持ちで計画に乗ったヘロヘロはその後随分と振り回されることとなる。

『だめです！全然なってませんよヘロヘロさん！そんな媚び媚びした動きはメイドとしてあってはならないんです！』
『お辞儀が浅いです！かといって卑屈になりすぎたらだめですよ！愛のある慎ましやかな感じで！』
『恥じらいは大切ですよ!!もっとこう!!ご主人様に迫られて戸惑いつつも、少し嬉しそうな!!』
『あー、わかるわー、禁断の主従関係に戸惑うメイドさん、いいわー』
『ペロロンチーノさん！分かりますか!!そうです！ヘロヘロさんも分かりますね!!』

「……う、なんだか昔の記憶がよみがったようなー……」
「は、ははは……まあ、メイド好きが高じてほんとに漫画家になっちゃうような人でしたからね……」

頭を抱えるヘロヘロの横で、モモンガが若干引いた笑い声をあげる。
「でも、彼本当に好きだったんですよね。メイドさんのこと。」
ホワイトブリムの熱い情熱により、ＡＩ担当のヘロヘロと外装担当のク・ドゥ・グラースは何度もダメ出しをくらい、夜遅くまでこの第９階層にて、メイドの極意について叩き込まれたものだ。
その時間はメイドたちの動作確認と作業の進捗の報告会というだけでなく、リアルでの愚痴をこぼす場にもなっていた。　一人の思いに引っ張られる形とはいえ、同じ目的のために励まし、成果を喜び合い、認め合うのはかけがえのない時間だったのかもしれない。
ヘロヘロにとってホワイトブリムとク・ドゥ・グラースは、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーの中でも特に親密な関係にあるメンバーだったと言える。
「メイドたちは誠心誠意で主人に仕えるもの、だからこそ主人もこれに誠心誠意応えろって、作り直しのたびに言われましたっけ。」
目の前で会話をしていると、メイドはこくり首を傾げる。まるで『何かごようですか？』と尋ねているようだ。一定の時間見つめながらもコマンドを出さなかった時に作動するよう組んである。この待機後のアクションは４１人一人ひとり違うマクロになっている。

美しくも可愛らしい、かといって媚びすぎたところのないデザイン。緻密な服飾やフリル、表情といった、細かい設定画を見事に表現した外装。そして、多くの隠し要素を盛り込んだ細かい人工ＡＩ。

こうして時間がたってから見ると、今の自分にはとてもできないようなことをやっている過去のの自分に押し負けそうになりそうな気迫と、どこかそんな過去の自分を誇らしいく思うような気持ちがむくむくと湧き上がる。

またしばらく見つめていると、メイドは恥じらうように目をそらし、頬を赤らめた。これもまたヘロヘロの組んだ動作のうちの一つだ。

「ほんとに、彼には随分振り回されましたよ。」

ヘロヘロは粘液で包まれた腕を伸ばすと、俯くメイドの頭をそっと撫でる。メイドは驚いたように目を見開くが、微笑むと軽くスカートを裾をつまんで膝を折りお辞儀して見せる。

「……モモンガさん、せっかくだし、この子も連れて行っていいですか?」

「かまいませんよ、ヘロヘロさん。」

「あー、モモンガさん、笑ってませんか?」

「そんな、笑うわけないですって。ほら、もう時間がありませんから早く行きましょう!」

骸骨の顔からは何の表情も読み取れないが、どうにも生暖かく見守られているような、いや、にやにやされている気がする。そんなモモンガの視線を無視し、ヘロヘロはメイドに付き従うようにコマンドを発した。

◆

ここまでの部屋がおとぎ話のお城ならば、ここはまさに魔王の部屋。ナザリック地下大墳墓の最終地点、第１０階層玉座の間。

深い地下の奥底なので自然光は入り込まないはずだが、そこはゲームの世界で自由な設定が可能なところであり、高い天井のステンドグラスからは月明りの光が差し込み、辺りを優しく照らしている。

赤い絨毯の先には、来るものを圧倒する巨大な玉座があり、その隣にはまるで聖母のように微笑む守護者統括、最高位ＮＰＣアルベドが寄り添っている。

ヘロヘロとモモンガは長く伸びた赤い絨毯を進んでいく。後ろには先ほど階段の付近で遭遇した戦闘メイドプレアデスと執事のセバスに、第９階層から連れてきた一般メ

イド・リュスィオールを加えたＮＰＣたちが静かについてくる。
第９階層で過ごすことが多かったヘロヘロにとってこの部屋はあまり馴染みがない。思わずキョロキョロと辺りを見渡してしまう。そういえば扉をデザインしていたウルベルトさんがここのことを自慢していたなぁとか、タブラさんから大した設定じゃないしまだまだ甘いから練り直したいと見せられたアルベドの設定文が長すぎて、途中で読むのをやめたとか、そんな他愛もない思い出が出てくる。
やがて玉座の前に着くと、モモンガは背後を振り向く。
「待機しろ。」
モモンガが命じると、配下たちは深く一礼し、その場に姿勢を正す。
ヘロヘロは辺りを見渡す。荘厳な玉座の間にいるのは、数人のＮＰＣたちと二人のプレイヤーだけで、改めてその広さを感じる。
「ここ、ですか？」
「はは……恥ずかしいけど、ロールプレイにのり気になってもいいんじゃないかって思いまして。」
モモンガはゆっくりと階段を上り、玉座の前に立つ。なるほど、このナザリック地下大墳墓に居を構えるギルド長、死の支配者《オーバーロード》の最後なら、とてもふさわしい場所ではなか。

「そうですね。時間まで、のんびりしていましょうか。」

ふと、隣に立つ配下の者たち姿が目に入る。そういえば、彼らはどんな設定だっただろうか。

ユグドラシルが人気となった一因にＮＰＣキャラメイクもある。日本人なら誰しも患ったことのある若気の至りが爆発し、そのキャラクター設定には邪気眼からギャルゲ設定、最強系、はたまたＢＬまで、あらゆる設定が盛り込まれたものだ。アインズ・ウール・ゴウンでもそれは例外ではなく、どのキャラクターたちも濃い設定を盛り込まれていたはずだ。

コンソールで配下たちの設定を開いてみると、その設定は面白いほど個人差が出ている。たっち・みーさんの作ったセバス・チャンの設定と、プレアデスたちの設定の文字数では倍くらい違うのではないか。唯一、やまいこさんの作ったユリ・アルファの設定が他のプレアデスより控えめなくらいか。他のプレアデスたちはといえば、どれもこれもめちゃくちゃな設定ばかりだ。

『朗らかで誰にでも優しく振る舞えるが、実際は人が苦しむのを見るのが大好きなサディスト』

『人間を体内でじっくり溶かし、その断末魔を聴くことが悦び』

『おやつはゴキブリ』

「うはー……皆随分盛りましたねぇ……これ、みなさん今も覚えてるんですかね？」
もし覚えていなかったらどうだろうか。設定を見せたら、やめてくれとのたうち回って恥ずかしがるのだろうか。それとも、逆に誇らしげな顔をするのだろうか。
「ペロロンチーノさんとか、絶対やばい設定つけてますよねー。あの人エロ鳥人でしたから。」
最後にリュスィオールのページを開く。そこにはやや控えめな文章が書き込まれている。
『ナザリックのメイド。彼女たちは誠心誠意ナザリックの支配者たちに仕え、その帰りを暖かく出迎えるだろう。』
「……」
その先にはまた文が続いているが、確かどのメイドもこの定文がついていたことを思い出す。その先はメイドたちに個性を出すため簡単な設定を付けた覚えがある。
何しろ４１人もいるのだ。中には「読書家」「快活」くらいのざっくりした設定だけの者や、何も書かれなかった者、逆に最初のうちのは細かく設定を盛り込まれた者まで様々だ。
「……色々作ったのに、忘れちゃってたな。」
再びメイドが、どうしましたか？と首を傾げる。

「なんでもない。なーんでもないよ。」
　ぽんぽんと頭を撫でると、嬉しそうにお辞儀をしてくるメイドを見ていると、なんだか娘を見ているような気持ちになる。
「あー、そういえばモモンガさんも何かキャラクター作ってましたよね」
「えっ？あ、はい！」
　振り向くと、玉座に腰掛けたモモンガがバタバタと挙動不審な動きをしている。
「……何してるんです？」
「っっえええ、なんでも！なんでもないですよー！はははは!!あー、ほら、ヘロヘロさん！あと少しですよ!!ほら、隣となり！」
　声が明らかに動揺している。自分が見てない間に何かあったのだろうか。
「なんです？隠し事はよくないですよ。」
「いやいやいや！なんでもないですって！もーほら、早くこっち来てくださいって！」
　本当に嘘がつけない人というか、アバター越しでこれはどうなんだと思うが、あまり追求はしないでおこう。残された時間はほんの僅かなのだから。
　ヘロヘロは玉座の横に立つ。一段高い場所からは、玉座の間がまるでステージからのように見渡せる。
　時計を見れば、残りは5分足らずといったところか。もう日付を超える。そう思った

途端、忘れていた睡魔がどっと襲うのを感じる。体が重く、視界が狭くなる。
「モモンガさん……俺ほんとに、寝落ちするかもでーす……はは……」
「えっ、じゃあ、ログアウトしてもらってもいいですよ。ほんとにたくさん話ができましたし。」
「いえ……あとほんの少しですし、サービス終了までうとうとしてまーす。」
「そう……ですか。」
　心なしか、モモンガの声が嬉しそうに聞こえる。ヘロヘロ自身も、何かに区切りをつけられそうな穏やかな心持ちであった。
「モモンガさんって、ユグドラシル何年くらい遊んでたんですかー?」
「んー、１０年以上は。」
「うわー、それじゃあほんとに、人生の半分近く遊んでたんじゃないですか?」
「……そうですね。ああ、なんだか１０年ってあっという間でした。」
「おじいちゃんみたいですよ。」
　ふふっと笑うと、モモンガはゆっくりと、柱に下がる旗をゆび指す。４１枚の旗。かつて仲間たち一人一人に与えられた紋章である。
「俺」
　細い骨の指が少しずつ動きながらその名を呼んでいく。

「たっち・みー」

ある時まで、ヘロヘロにとってユグドラシルはあまり楽しいゲームとは言えなかった。執拗に続いたＰＫは、ある時期にプレイしていた異業種プレイヤーには誰しも経験があることだ。

それでもヘロヘロがユグドラシルを続けた理由は、きっと『彼』にあるのかもしれない。

同じ思いを胸にしたメンバーは彼の元に集い、少しずつ仲間を増やし、大きな力になった。

「死獣天朱雀、餡ころもっちもち、ヘロヘロ、ペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜、タブラ・スマラグディナ、武人建御雷、ばりあぶる・たりすまん、源次郎……」

ただ、ＰＫに負けず純粋にゲームをしたかった。ただそれだけのために集った仲間たちだったが、なにもかもに全力で挑んだ。未知のステージの踏破、敵対するギルドとの対決、ナザリック地下大墳墓の制圧、そして改装。

４１人もメイドたちを作ったのだって、今思えばかけがえのない時間だった。もっと早く来ていれば、彼女たち一人一人の顔を見る時間くらいあったかもしれないと少し後悔する。

読み上げられる名前を聞いているうちに、眠気は増し、だんだん視界にノイズが混じ

りだす。おそらく眠気のせいでユグドラシルとの接続が途切れそうになっているのだ。

（もう、だめだ。寝落ちしそう……）

「ヘロヘロさん」

突然かけられる声に意識が引き戻される。モモンガがこちらを見ると、ぴょこっと笑顔のエモーションマークを出す。

「今日は来てくれてありがとうございました。……俺、本当にユグドラシルが楽しかったです。」

モモンガの一言に、ヘロヘロもエモーションマークで答える。

辛かったこともあったし、楽しかったこともあった。どうして今まで、忘れていたのだろうか。今はじめて、この世界が終わることを実感する。

（ああ、本当に）

「そうだ、楽しかったんだ。」

モモンガの呟きが、じんわりと頭に広がる。

そう、楽しかったんだ。現実ではとても出会えないような仲間たちとの夢の時間は終わり、すべては現実にかえるのだ。

時計の表示は２３：５９：３０。　３１、３２……

睡魔の波に飲まれ、ヘロヘロはゆっくりと目を閉じ、頭の中でカウントを続ける。
４８、４９、５０、５１……
「また……どこかで、お会いしましょう……」
サーバーが落ちる直前に呟いた一言はモモンガに届いただろうか。
世界がブラックアウトし、同時にヘロヘロは深い眠りの世界に落ちていく――

・

ヘロヘロが目覚めるのは、それから数週間先のこととなる。

姦しい宝石

♦

ナザリック地下大墳墓、第9階層のとある一室前。
美しい金の縁取りをした品の良い黒の扉の前、白黒のフリルが蠢いている。――それぞれ赤、青、緑の髪が眩しい。
「……聞こえない……サフィール、もうちょっと屈んで！あんた、お尻おっきいから邪魔なんだってば！」
背伸びをして扉に耳を寄せていた赤髪の二つ結びのメイドが、無理やり青髪のメイドのうえに乗りかかる。なんとか扉に耳をつけることが出来たが、下敷きになった青い長髪のメイド、サフィールは背中に少女を背負うこととなりぐらりとバランスを乱す。
「きゃっ!?り、リュビ、貴方乱暴よ！」
「貴方たち煩いわよ、聞こえないってば！」
サフィールの下になり、もたれ掛かられていた細身な緑髪のメイドが、小さく悲鳴をあげる。

こそこそと、それこそ大声にならないように声量を抑えてはいるものの、扉に張り付いてじたばたとしていれば小さな絹擦れが響くものである。物音を立てないよう気を配っているものの果たして効果はあるのか。

「ああ……ヘロヘロ様！シクススが羨ましいわ。今日ヘロヘロ様のお世話の日だったなんて！」

サフィールはうっとりといったように顔を緩ませる。もともと垂れ目がちな瞳は熱を帯び、更にとろんとしたものになる。その下で下敷きになる切れ長の瞳のメイドの苦悶の表情とは対照的だ。

「さ、サフィール、重い……！ちょっとはバストの分考えて屈んで……！リュビは小さいからまだしも……！」

「しーっ！静かに！何か話されてる！」

「ちょ、本当に……痛っ！」

下からの悲鳴を無視し、赤髪ツインテール――リュビは扉に耳を押し付ける。まだ幼さの残る顔を真剣に引き締め、微かな声を拾おうとする。……低い男の声はアインズ・ウール・ゴウン様そのものだろうか。二言三言何か話すのが聞こえるが、すぐに沈黙する。怪訝に思いながらも、低い背を伸ばし扉にくっつき、耳をそばだてる……が。

「こんなところで、アインズ様に何かご用ですか？……わん」

突如後ろから掛けられた声に3人の心臓が飛び上がる。
扉から弾かれるように跳びのき、振り向けばとても優しい菩薩の顔が目に入る。同時に（実際には流れてはいないのだが）全身の血がざっと引くのを感じる。
「ペ、ペストーニャ、さま……」
そこにいたのは可愛らしいメイド長、ペストーニャ・ワンコだ。ペストーニャに用いる『可愛らしい』というのは人間に使う言葉とはまた異なる。
くりくりとしたつぶらな瞳に艶やかなキューティクルが美しい栗毛色の毛、真っすぐに伸びた鼻……いや、マズル。愛くるしい犬頭――真ん中に大きな縫い目があるが、それもまたぬいぐるみかマスコットのようで愛らしい――は懐こい顔をしている。
だが、彼女のことをよく知る3人にはこれは笑顔でないことは痛いほど分かる。尻尾は微塵も揺れず、口角がわずかにヒクついている。
「あ、あはははは、わ、私今から清掃の仕事があるので、これで……」
「エメロード！ふざけないでよ！」
リュビはそろそろと二人から離れ始めていた緑髪のミディアムヘア――エメロードのスカートを慌てて掴む。その様子を見て、ペストーニャの口角が更に上がり歯が剥き出しになる。
「アインズ様は現在ヘロヘロ様とお二人で話がしたいと仰いましたね？……わん」

ペストーニャの縫い目から、みしりと不穏な音が鳴る。
ガタガタと震えながら身を寄せるメイドたちに、ペストーニャは笑顔のままゆっくりと迫る。
「話は後でゆっくりと聞かせてもらいましょうか。……がう」

♦

『メイド3名がまだ扉の前に居ましたが、ペストーニャ様の指示にて下がらせたとのことです』
『ご苦労。引き続きホールにて警備を続けろ』
『はっ』
「……やれやれ」
「な、なんかすみません……」
「いや、いいんですよ。彼女たちもヘロヘロさんが目覚めて、きっと嬉しいでしょう」
こめかみから指を離したモモンガは肩をすくめる。二人がいる応接間の真ん中には分厚い硝子のテーブルがどんと置かれ、熱い紅茶注がれたカップは温かい湯気を立ちの

ぼらせている。カップは一つのみだ。

二人はすぐにモモンガの部屋に移動したものの、ヘロヘロが目覚めたことはメイドたちの間でナザリック中に広まったらしい。それからメイドたちがひっきりなしに紅茶をもってきたり、お茶菓子を持ってきたり、何か用事はないかと部屋に押しかけ、ヘロヘロを一目見ようとちょっとした騒ぎになった。挙句入り口には２０数名のメイドたちが集まってくる始末で、結局全員に入室を禁じたのだが……八肢の暗殺蟲（エイトエッジ・アサシン）の連絡によれば、廊下の扉の前でまだ数名が残っていたらしい。

廊下から扉に耳を当てたところで、一部屋挟んで更に奥の応接間での会話が聞こえるはずもなく、ましてレベル１の人造人間（ホムンクルス）が護衛スキルに特化した八肢の暗殺蟲（エイトエッジ・アサシン）の警備網をかい潜れるわけがない。彼女たちの必死の努力も虚しく、あとはメイドたちを監督するペストーニャに引き渡されただけだ。

「ペストーニャなら、まあ彼女たちを威圧しすぎず注意できるでしょう。ここで糾弾しても彼女たちの好意に水を差すだけですし」

「そう……ですか」

ヘロヘロは思わず目の前の死の支配者（オーバーロード）、モモンガを見つめる。足を組みどっしりと椅子に構える姿は、ほんの数週間（――ヘロヘロの感覚としてはまるで昨日のようなのだが）見ないうちに、随分様子が変わったように見える。

まさに支配者然としているというか、この状況に慣れてしまったようだ。ソファーに沈み込んでいたモモンガは背を起こし、ヘロヘロに向き直る。
「さて、先ほどの続きですが……ヘロヘロさんは、今のこの状態をどう思いますか？つまり、アバターの姿で、ユグドラシルのＮＰＣに囲まれている状態です。」
「……ユグドラシルのゲームが続いているわけではないと思いますねー」
それについて、ヘロヘロは確信していた。先ほどのように自分の意思をもって行動するなど本来のＮＰＣからは考えられない。造った本人としてはそれはあり得ないと断言できる。しかしシクススの動作のように、本来組んだプログラムを反映している点は、ユグドラシルの性質を継いでいる。
まるでユグドラシルの世界がそのまま現実に再現されたかのような、再現度と現実感の同居。
目の前にあるカップの紅茶ですらそうだ。紅茶からは、花にも似た、甘さを連想させる優しい匂いが鼻腔をくすぐる。
「ＤＭＭＯ対応コンソールでは、嗅覚は再現できませんねー。そういう機能のあるコンソールは販売禁止されてましたから」
「ユグドラシルでも、味覚・嗅覚はなくて、触覚も制限されていましたからね」
「というか、そんなんゲームに詰め込んだら、人間の体はぶっ壊れますよ。頭と脳みその

情報に差が開きすぎるんでー」
「まあ、そこら辺は俺なんかよりヘロヘロさんの方が詳しいと思いますが……そういうわけで、その紅茶も本物ですよ」
たしかに香しい紅茶の香りも、立ち上る湯気の温度も、ＤＭＭＯで再現できるレベルのものとは思えない。
急に、空腹とまではいかないが、何やら口寂しさを思い出す。飲食不要のアイテムはゲームの時から装備したままなので、数週間眠ったままにも関わらず、空腹を全く感じていない。が、食事をしたいという欲求はなんとなく感じられる。
「……飲食、できるんですか？」
「俺はアンデッドになったもので、食べることができなくて試したことはないんですけど……出来ると思いますよ」
ヘロヘロはそっとカップに手を伸ばし、細い持ち手を摘み上げる。
「あっ！ちょっと待っ……」
「え」
モモンガの静止が先か後か、温かい手でチョコレートを握った様なぐにゃりとした感覚のあと、カップがするりとこぼれ落ちる。握った取手が手のの中に沈み込み、椀がぼろりと取れた――陶器が溶けている。

膝（？）にカップが落ち、温かい紅茶をぶちまける。熱くはない。が、こぼれた紅茶が騒々しい音を立てて蒸発する。落ちたカップも膝の上でじゅわじゅわと溶け出している。

慌ててソファーを見れば、自分が座っている周りが焦げ出したようになっている。

「ヘロヘロさん！スキル！スキルオフにしてください！」

「えっ？オフ？」

ゲームじゃあるまいし……と返そうと思うよりも早く、ヘロヘロはその方法を思いつく。説明のしようがなく、もともと身体に備わっていた自然な動作のようにそれを行うことができる。自分の周囲に膜が張り巡らされたような感覚。いや正確に言うなら、体液の酸部分が体内に凝縮したような感覚だ。

紅茶はまるで油に浮かぶ水のように、膝の上で水滴となって震えている。手に掴んだ取手は粉状にボロボロとなり、身体に流れ出す。体表に浮かんだ取手の欠片がぽろりと落ちた。

ゲーム内では打撃、斬撃などを半減する特殊スキルを持つスライム種だが、なるほどこういうわけだったかと妙に納得する。

「はー、すっかり忘れてました。ここではフレンドリーファイアーが解禁されてますので、耐酸性のないアイテムはこうなるんですね……。ヘロヘロさんの部屋のものは酸耐

性あるものでしたから、すっかり忘れてました」

「な、なるほどー……」

ヘロヘロはため息をつく。改めて自分が人ならざるものになったことの恐怖を覚えた。両手……という呼び方が正しいのかもわからない、身体から突出した2つの触手を見つめる。ぐにぐにと蠢めくそれには関節もなく、生き物のものとは思えない。どちらかと言えば海鼠（なまこ）とか蝸牛（かたつむり）に近い生き物になったような感覚だ。それでいて知覚だけははっきりしている。音、振動、視覚、匂いに対しては特にそうだ。人間であったころには感じられなかった微細なものまで拾っている感覚がある。

――更に恐ろしいのが、ここまで人間離れした変化をしたにも関わらず、頭はまるで、『産まれた時からこうだった』というような、奇妙な充足感を伝えてくる。むしろ筋肉で必死になって骨を支えていた人間のころの方が違和感を覚える程だ。

「ＮＰＣは自由になっているし、俺はスライムになってるし、……一見ユグドラシルのようでも、ここはユグドラシルではないんですね」

「ええ……恐らくはユグドラシルが現実化した、と考えられます」

「……そんな」

ばかな、とは言えない。前述したとおり、ユグドラシルでありながら、ゲームではありえない現象が起きていることを、プログラマーであるヘロヘロは理解している。

これまでの常識を覆す事態だが、論理的な裏付けがこのことが事実だと言っている。否が応でも認めなくてはならないようだ。

「そしてもう一つ、ナザリックの周辺地理、モンスター、文化圏はユグドラシルのものと大きく異なるものになっています」

「……つまり？」

口がないのか幸いした。きっと口をぽかんと開けて、間抜け面を晒してしまっていただろう。

「つまり……どうやら俺たちは、アインズ・ウール・ゴウンごと異世界に来てしまったみたいです」

「いせかい」

またしても間抜けな声を出してしまう。『異世界に来た』、とはどういうことなのか。ここは一体どこなのか。

そして現実は一体どんなことになっているのだろうか。

――　現実

再度胃の中に（内臓が存在するのかは不明だが）ドスンと重しが落ちるのを感じた。

「……ごと……」
「ええ、今はとにかく、情報が不足しているものですから、とにかくこの世界のことを調べてまして」
「し、仕事ぉ!!」
「うおっ!?」
絶叫をあげたのと机に腕を叩きつけたのはほぼ同時だった。既にカップはヘロヘロの体内にて融解していたため、ドスンという鈍い音が響くだけだ。
唖然とするモモンガにかまうことなく、ヘロヘロはまくし立てる。
「も、モモンガさん、長いことお世話になりました!!おれ、仕事、行かなきゃ……納期近くて……こ、殺される、上司に、ころ、ころされ……ええ……」
が、怒りも恐れも、病的とも言える、脅迫的な感情すら、ヘロヘロの胸の中から消失する。
――この感触は目覚めた直後に体験している。臓腑の中身全てをぶちまけさせそうになる絶望感ですら、どうでもいいと思えてしまう、強制的な精神の安定化。
「……スライム種基本特殊スキル『精神作用無効化』ですよ。俺もアンデッドですから、なんとなくわかります」

激化した感情が霧散し、残るのは大声を上げてしまった居心地の悪さと、胃の中に燻る焦燥感のみ。

叩き付けた腕をどうしたらいいのかわからず、ヘロヘロは所在なさげに叩いた机をなでる。モモンガの気遣うような視線を浴びながらも、よろよろとテーブルから離れた。

「今の悲鳴は何事ですか!!」

「アインズ様！ヘロヘロ様！ご無事ですか!!」

どこから入ってきたのか、八肢の暗殺蟲（エイトエッジ・アサシン）たちが扉を開くことなく現れる。当然、護衛スキルの賜物だ。

が、感情の波に揺さぶられたヘロヘロの目にはそれすら映らない。八肢の暗殺蟲（エイトエッジ・アサシン）たちの間を抜け、言葉もなく扉へと向かう。

八肢の暗殺蟲（エイトエッジ・アサシン）たちは困惑したように、アインズとヘロヘロとを見比べる。アインズは言葉を発することなく片手をあげ、八肢の暗殺蟲（エイトエッジ・アサシン）たちを静止する。

「ヘロヘロさん」

「……すみません、でも、俺、やっぱり帰らないと……」

「待ってくださいヘロヘロさん！どうするつもりですか！」

モモンガの呼びかけに対し、ヘロヘロは答えることができなかった。たっぷりの沈黙のあと、ヘロヘロは弱弱しく首を横に振る。

「……帰る方法は……ないんですか」
「……試したことがないですね」
「なんでっ……！」
モモンガの回答に勢いよく振り返る。
眼前の骸骨は動かない。まるで表情というものが読み取れず、またしてもヘロヘロの激情は行き場をなくす。――注視すれば瞳の奥の光源が弱く光っていることに気付いただろう。が、今のヘロヘロにはそれに気づくだけの余裕がない。
モモンガとヘロヘロは比較的近い境遇だったといえる。毎日仕事仕事、帰っても待つ者はいない。友達と遊ぶ機会もない。ただ、ゲームのみがささやかな楽しみ。そのはずだった。
しかし同時に二人には大きな隔たりもあった。
「……俺がいないと回らない仕事があるんです。確かに俺は会社にとっては使い捨ての歯車で、代わりだっているのかもしれない。だけどあんな……半端に仕事を残して帰れるはずがないですよ。
同僚の連中に連絡もなしに消えたらなんて思われるか……それに……おふくろだって……実家に、仕送りしないと、いけないし……」
ヘロヘロはモモンガほど、現実に見切りをつけてはいなかった。

「ヘロヘロさんは、あの世界に帰りたいんですか?-自然は汚染されて、自由もない、何もないあの場所に」
「逆に聞かせてください、モモンガさん。あなたは、帰りたくはないんですか……!」
「……」
　答えはない。骨の面はただただ空虚である。その冷え切った骸の顔に、ヘロヘロは言葉を失う。これ以上はお互いの利にならないと、冷静な思考が警告する。
「……ちょっと、頭、冷やしてきますねー……はは」
　ヘロヘロはモモンガと八肢の暗殺蟲（エイトエッジ・アサシン）たちの視線を浴びながら、振り向くことなく廊下へと這い出る。
　……とはいえ、モモンガに指摘された通り、帰る方法など検討もつかない。その上この広大なナザリック、ただ歩いているだけでも過敏になった精神を揺さぶるものは山ほどある。例え抑制されるとはいえ、自分の感情が制御されるのは気持ちのいいものではない。
　ふらつく足――いや、管足を引きずりながら、ヘロヘロは自室へと這い戻るのであった。

♦

「あんたたちまたやらかしたわけ!?」
ナザリック地下大墳墓、第９階層――従業員食堂に、一際大きな声が響く。
その高い声が一際大きいだけであり、食堂内は奇妙な熱気と騒ぎに満ちている。その騒ぎの中心には４人の人物がいる。
「ほんっとにサイテー！バカじゃないの!?こともあろうに至高の御方の部屋の前で聞き耳だなんて、礼儀知らずにもほどがあるわよ!!」
少女がヒステリックに叫ぶたびに、お団子から下がるリボンが激しく揺れる。赤いフチの眼鏡の下には激高して燃える碧眼。
他のメイドたちと比べるとかなりこじんまりとした少女が睨みつけるのは、ツインテールのメイド、リュビ。その後ろにはいつもの取り巻き、サフィール、エメロードが続く。
「分かってるってば！ていうか、ついさっきペストーニャ様に散々怒られたって……」
手を後ろ手に組んだまま、リュビは唇を尖らし、少女から視線を逸らす。そんな拗ねたような態度が少女の癪に障ったらしく、少女は更に声を張り上げる。
「怒られたぁ!?そのくらいで終わっていることに感謝しなさいよ！っていうか、まだ口

答えするってことはあんたまだ反省してないでしょ!?」

少女に指を突き付けられ、リュビは言葉に詰まる。自分が悪いということなどわかっているが、先ほどから頭に響く甲高い声が短気な彼女をイラつかせる。

「あーもう!反省してるし悪かったと思うけど!あんたに言われる筋合いはない!チビ眼鏡!おせっかい!」

「あんたも似たようなもんでしょ!?バカチビ!脳筋!!」

お互いに噛みつかんばかりににらみ合う――が、お互いこのメイドたちの中では珍しい小柄なメイド同士のため、迫力はなくただただ姦しい。むしろ子供同士の喧嘩のようで、どこか微笑ましくもある。

後ろのサフィールはいつものようにぼんやりとほほ笑み、「まぁまぁ」と声をかけ続ける。

エメロードは二人の口論には我関せず、すでにバイキングを視線で追い取るべきメニューを物色し始めている。それほどまでにこの二人の口論は日常茶飯事だ。

周りのメイドたちはといえば咎めるような視線を3人に向けるも、それ以上の追及はしない。もちろん3人の行った行為は好ましいものではない。しかしそれが許されているのは、彼女たちがそうあれと造られているからだ。

お転婆で好奇心が強く、やや粗雑な面を持つリュビ。おっとりとしていて、少し抜け

た部分があるも優しい姉役であるサフィール。そして表面では美しく振舞うも、内にはやや狡い面を持つエメロード。

一般メイドたちの中では初期に造られたため、濃い設定――性格を持ち合わせている。三人はナザリックにおいて、ちょっとしたトラブルメイカーとして存在することが望まれている。

そして、メイドたちの中にはそのような存在を許さない存在として造られた者もいる。例えばこの少女のように。

「まぁまぁ、リプスちゃん、落ち着いて？ね？」

「なんであんたに宥められてるのよ!?あんたたち二人がちゃんとこの子を見張っときなさいよ！」

「いや～～、ごめんなさい～～」

怒鳴りつけられても、ふにゃりとほほ笑むサフィールに、お団子少女――リプスはがくりと脱力する。

「いやあ、私たちの力じゃとてもじゃないけどリュビは止められないって。……まあ、その場で誘惑に負けたのは悪かったけど」

エメロードは一口サイズにカットされたリンゴがささったフォークをぷらぷらと振って見せる。

「エメロード……あんた、何しれっとバイキング回って来てるのよ、あと立ち食いはやめて」
　リプスの恨めしい視線もかまわず、エメロードは瑞々しいリンゴを一口齧る。
「そうっすよー！いやー、相変わらずえーちゃんは抜け駆けの達人っすねぇ！見習いたいっす！」
「っンぐ！」
「ひえっ」
　突如咀嚼が中断されたりんごが詰まり、身悶えするエメロードを乱入者が優しく受け止める。
「る、ルプスレギナさん！急に現れるのはやめてくださいよ！」
「し、死ぬかと思った……」
「大丈夫っすよー！死にかけてもちゃんと回復してあげるっす！」
　こほこほとせき込むエメロードの背中をとんとんと叩きながらほほ笑むのは、戦闘メイド（ブレアデス）が一人、ルプスレギナ＝ベータである。
「ちょっとルプー、あまりこの子たちをからかわないで」
「ユリ姉はお堅いっす！これはフレンドリーな挨拶っすよ！」
「ゆ、ユリ様！」

更に現れた戦闘メイド（ブレアデス）――ユリ＝アルファに一般メイドたちは息を飲む。
戦闘メイド（ブレアデス）は、一般メイドとはまた異なる地位を有している。そのため、一般メイドたちにとって彼女たちは憧れの的であり、こうして接する機会があるだけでも羨望の眼差しを受けることとなる。
特にユリはその戦闘メイド（ブレアデス）たちのリーダー的な存在であり、一部からは熱狂的な人気がある。……いや、リーダーである彼女への憧れもあるのだが、それ以外の部分での人気が根強い。
「ぼく……いえ、私たちが脅かしてしまったら、彼女たちも緊張するでしょう？」
「そういうところがお堅いっすよー。あんまり堅いことばっかり言ってると、顔が怖くなるっすよー？」
「怖…!?いえ、まぁ、いいわ」
こほん、と咳ばらいをするとユリはリュビに向き直る。
薄々彼女がこちらに現れた理由に察しがついていたリュビは唾を飲み込むと、姿勢を正す。
「さて、リュビ。アインズ様は今回の件については、不問になさるそうです。アインズ様も今はヘロヘロ様のお目覚めを喜んでおり、その喜びを私たちが共有することをお許しになってくださっています。故に、今回のあなたの非礼も、ヘロヘロ様を案じたためと

お許しになってくださいました。そのご慈悲、しかと胸に刻みなさい。そしてまだ守護者の方々ですらお会いしていないのに、先んじてヘロヘロ様にお会いしようとしたことがどれだけ身の程知らずか、しっかり考えなさい」

「っ……はい！本当に、申し訳ありませんでした！」

弾かれたようにリュビは頭を深々と下げる。思わず眼がしらが熱くなり、瞳が水っぽくなるのを止められない。

ヘロヘロ様が帰ってきた、それだけで胸と頭がいっぱいになってしまい、暴走してしまった。どうして自分はいつもそうなのだろうか。

――そしてそれをお許しくださるアインズ様のなんと慈悲深くお優しいことか。

「あなたたち二人も、同行したのならきちんと反省しなさい」

「はいっ……！」

「本当に、申し訳ございません……」

同様にサフィール、エメロードも深く頭を下げる。

「――まあ、それはそうと、あなた達が謝罪を向けるのは私ではないわ。それはわかっているでしょう？」

ユリの一言に、３人はきょとんと顔を見合わせる。

「アインズ様からお許しはいただいたとはいえ、まだヘロヘロ様のお許しはいただいて

いません。まずはあのお方に謝罪をすべきでしょう。ヘロヘロ様になんとか機会をいただくから、しっかり謝罪なさい？」
「はいっ！ユリ様！」
「ありがとうございます！」
　３人は顔を綻ばせ、大きく礼をする。ユリは優しくほほ笑むと、今度はぐるりと周囲のメイドたちを見渡す。
「貴方たちも、ヘロヘロ様がお目覚めになって嬉しいのは分かるけど、あまりはしゃぎすぎないよう、気を引き締めて……」
「あっ！シクスス！」
　メイドのうちの誰かが大きな声を上げる。瞬間、メイドたちの注意は一気に声の方へひきつけられ、そして呼ばれた者に集約する。
　呼ばれた当人は２人のメイドの陰に隠れてこそこそとテーブルに向っていたようだが、びくりと跳ねると、慌てて入ってきた入口へと引き返す。シクススをかばっていた２人も慌てて後を追う。
「ちょ……！待ってよシクスス!!」
「まともにヘロヘロ様とお話したのあなただけなんだから！」
「話くらい聞かせてよー！」

黄色い声が食堂中に響き、もはやユリやリュビたち3人への注目など皆無である。はぁ、とため息をつくユリに「どんまいっす！」とルプスレギナが肩に手を置く。
「本当に、これはしばらく収拾がつかなそうね……」

♦

「……ごぼごぼ」
部屋の中央からは奇怪な水音が響いている。がぼがぼ、ごぼごぼという音は聞きようによっては人が溺れているようにも聞こえるが、その音には焦りもなく、眠たげなリズムで響いている。
巨大なベッドには、広くコールタールのような染みが広がっている。もっとも、その染みがこの部屋の主なのだが。
「……ごぼごぼごぼ……はぁ、何やってんだ」
部屋の主、ヘロヘロは気泡音を立てる遊びにようやく飽きたのか、何度目かのため息を吐き出す。いや、もとはといえば、何度もため息をついているうちに、空気の出し方によってはこういったごぼごぼ音が出せると気が付き、何をするわけでもなく遊んでいたわけなのだが。

「モモンガさん、あれは怒ってたよな……アンデッドの外見だと、表情が全然読めないけど」

再びベッドに突っ伏し、ごぼがぼと無意味な音を立て続ける。粘体の体になって少しだけいいなと思ったのは、これまでの人生で初めて、ここまで脱力しきった姿勢をとることができたことだろうか。

重力に抗わず力を抜き切り、ベッドに際限なく染みわたる。自分の境界が希薄になり、だんだん眠たくなる。もう、何もかもどうでもいい……

「いや、よくないよ！」

広がり切った液体がぎゅっと凝縮し、再び弾力のあるスライムに戻る。危うく身体と一緒に思考まで蕩かすところだった。

「というか、なんとかして帰らないと……こっちとあっちとじゃ時間の流れが違ったりとかしないよな……戻ってみたら、軽く5年くらい経ってたりしないよな！」

うわーっと思わず触腕を振り回す。いつまでも会社に現れない自分を訝しんで電話がひっきりなしに鳴り響く中、ＤＭＭＯ用コンソールをぶら下げて、ＰＣデスクの前で衰弱死、なんて――

「――どうでもいいか……いや、よくない。よくないけど……」

どうもこの体になってから、重大な問題への焦りが消失しがちだ。これもスライムの

特殊スキルの影響かもしれないが、自分の心が自分のものでなくなったかのような居心地の悪さがある。

再びベッドへと落下し、融解して伸び広がる。蕩けきるのは心地がいい。目の前の現実をこのまま放棄して、眠ってしまいたい……

「……モモンガさん、帰りたくないのかよ」

何度も鎮静化されようとも胸に燻る憤りが、ごぼりと声になる。

いくら仮想世界が素晴らしいものであっても、何もかも捨ててこの世界に馴染めるものなのだろうか。現実でのしがらみを思えば、帰りたくて仕方ないのではないか。自分だったら、真っ先に何とか元の世界に干渉する方法を模索しただろう。

彼（モモンガ）にとって現実とはその程度の価値しかなかったのだろうか。いや、それとも。

「仮想世界がそんなに大切なのか……」

自分はどうだろうか。きっと、もっと若いころなら、架空の世界に体一つで飛び込み、自由奔放に生きることができたのかもしれない。しかし今や自分は大人であり、現実に自分の居場所があり、役割があることを知っている。

それらを全てなげうって、ここで暮らすことができるだろうか。

「……」

焦がれたはずの自由が、こんなにも恐ろしいとは。

『ヘロヘロ様』

突如、頭に響いた女性の声が思考を呼び戻す。

「は、はい!?」

慌てて跳ね起き、返事をする――メッセージだ。この感覚はユグドラシルのものとほとんど変わらない。

『失礼いたします。ヘロヘロ様。戦闘メイド（プレアデス）が一人、ユリ＝アルファでございます。ヘロヘロ様にお目通りを願う者たちを連れてまいりました。』

「は、はい、どう……い、いや……ああ、わかった」

モモンガの威厳ある振舞いを思い出し、慌てて声を引き締める。ＮＰＣたちが現実のものとなった以上、その忠誠心は絶対のものかもわからない。そのような状態で戦闘能力も有していることの危険性はヘロヘロも理解している。

まして先ほどまで出会った一般メイドとは異なり、ユリは戦闘メイド（プレアデス）である。たとえレベルの上では優位であったとしても、警戒するに越したことはない。

ベッドから這い出すと、すぐに自室のホールへと向かう。

しばらくして、乾いたノックの音が響く。

「ああ、入れ」

「はい。では3人とも、中へ」
ゆっくりと開いた扉から、3人のメイドたちが姿を現す。同時に「うわっなつかしっ」という声が出そうになるがすぐに飲み込む。
４１人の中でも初期に造られたメイド3人組、リュビ、サフィール、エメロード。命名はク・ドゥ・グラースであり、そのキャラデザインも現在のホワイトブリムの作風とまた違う出で立ちである。後期の緻密でリアリティのあるメイドよりも漫画よりというか、粗さがある。が、それもまた懐かしく、実際に動いているのを見るのは感慨深い。
３人ともかなり快活な設定だったはずだが、今は緊張しているのかわずかに震えている。
「……」
「……」
４人はヘロヘロの前に並ぶと、一言も発することなく直立する。
（あ、これは、俺から話しかけないとだめなやつだろうか）
「あー、用件はなんだ？」
「はい。先ほどアインズ様とヘロヘロ様がお話しされている間、大変失礼ながら、お二方のお話しに耳を傾けていた者たちです。まずはその非礼を、謝罪させてください」
「もうしわけございません！ヘロヘロ様！」

「本当に、仕える者として在るまじき行いでした……」
「申し訳ございません……」
　3人はかたかたと震えながらも、口をそろえて謝罪する。あまり少女たちを萎縮させているというのも気分がよくない。
「ああ……それで、何か耳にしたか？」
「いえ、何も……」
「それでも、やった行いは間違っていたと存じております！」
「本当に、申し訳ございません！」
　このままでは永遠に謝罪が繰り返されるだけだろう、ヘロヘロは慌ててそれを静止する。
「いや、いい！君たちの気持ちはわかった。今後このようなことが無いよう、気を付けてくれ」
「！……あ、ありがとうございます！」
「ヘロヘロ様の深きご慈悲、感謝いたします！」
「ありがとうございます！」
「……あー……」
　3人の猛烈な謝罪にヘロヘロは困惑する。ひょっとして、自分はメイドたちから恐れ

られているのではないだろうか、という疑念がもたげる。ヘロヘロとしては他者に懲罰を与えるとか、そういう趣味は全くない。

それにヘロヘロの現実での仕事はプログラマーであり、技術職だ。他者の上に立ち、命令し、まして罰を与えるなどという機会はあまりなかった。もちろんチームでのリーダーとかそういったものはあったが、ここまで主従関係が明確な交流は生まれて初めてである。いや、メイドに仕えられた経験のある人間があの世界にどれほどいただろうか。

「いや、いいんだ。何もそう怒ってはいない……それより、どうしてまた聞き耳を立てようとしたんだ？」

ヘロヘロの問いかけに対し、3人は一様に黙り込む。全員俯き、言葉を発しようとはしない。気まずい沈黙が流れるも、ここで急かしたら泣かせてしまいそうで、言葉がでない。どうしたものかと様子をうかがう。

やがて、リュビがぽつりと呟く。

「へ……ヘロヘロ様に、お会いしたくて……」

それにつられるように、3人の口からぽろぽろと思いがこぼれだす。

「ずっとずっとお待ちしていたヘロヘロ様が、やっとお越しになられて、それで、私たち、ずっとお会いしたくて……」

「……ヘロヘロ様がアインズ様と共にお越しになられたときは、本当に嬉しかったんです。また、私たちをお造りした『三柱』のお一人にお仕えできると」

今にも泣き出しそうになり、呂律が回らないサフィールに代わり、エメロードが続ける。

「でも……あの後、ヘロヘロ様は深き眠りに就かれてしまって……」

「もぉ、お目覚めにならないんじゃないかって……！」

しゃくりあげるサフィールは言葉を続けられず、その時の恐怖を思い出しているのか、ぼろぼろと涙をこぼす。

気丈に振舞うエメロードもまた、顔を歪めまいと必死に堪えている。

「だから……だから今日ヘロヘロ様がお目覚めになられたときは本当に嬉しくて……！一目でもお会いしたい、声だけでも、お聞きしたくて……！」

泣くまいと堪えるリュビのスカートを握る手は白く透けている。震える声を抑えようとしているのか、何度か深く呼吸する音が響く。

が、ふっと手の力が抜ける。再び上げた顔には力なく笑顔が浮かんでいる。

「でも、ヘロヘロ様がお戻りになって……またお仕えできることができて……本当に幸せです……！今日は大変な無礼をしてしまいましたが、どうかこれからも、お傍でお仕えさせてください！」

残る2人もこくこくと頷く。視線を向ければ、3人の後ろに立つユリもまた頷いて見せる。

ヘロヘロはただ圧巻されていた。なんと返すべきかわからなくなる。ここまで心配され、身を案じられたことが今まであっただろうか？

だからこそどう返したらいいのかわからない。不相応と言えるほどの好意を、敬意を向けられて、それに対してどう振舞えばいいのか。自分がそれだけ優遇されていいのか、素直に受け止めることができない。

迷いはそのまま、先ほどまでの葛藤と結合する。

「あ、ありがとう……君たちが私のことを案じてくれていたのは分かった。しかし、いずれ私も帰らなくては……仕事があるし……いや、なんでも」

思わず口をついて出たヘロヘロの言葉に対する反応は、劇的なものだった。

サフィールは息を飲み口元を抑える、エメロードの顔から一気に血の気が引き、もともと白い肌が紙のように血の気がなくなる。ユリもまた、愕然とした表情になり、何か発しようと口を開く。

「――いかないでください!!」

が、ユリが何か話そうとするよりも早く、大きな声が響く。と同時に、腹部に軽い衝撃。見下ろせば赤いおさげが揺れている。――まだ幼く、直感的に行動するような性格

に造ったゆえ、リュビの想いの表し方は真っすぐだった。
「い、いやです！いかないでください！何でもいたしますから!!ヘロヘロ様にしかできないお仕事かもしれませんが、私たちもお手伝いします!!できることはなんでもしますから……!!だから……だからぁ……!!」
　続く言葉は嗚咽に代わり、流れる涙が自分の体表から吸い込まれ、混合しているのが分かる。――しょっぱい、などと妙なことを考えてしまう。
「私たちからもお願いします！どうかいかないでください!!」
「もう二度とこんな失態はいたしませんからぁ……見捨て……ないで……」
　気が付けばサフィール、エメロードたちは膝をついて泣きじゃくっている。美しく品のあるメイドたちというよりは、もはや駄々っ子と言ってもいいだろう。喉が詰まって声が出ないのにも拘わらず、嗚咽交じりに嘆願され続ける。
　ヘロヘロもまた、言葉に詰まった。同時に、妙に熱いものが体内で形成される。
　ただ、泣きじゃくるリュビの両肩に触腕を回す。
「……ごめんな……大丈夫、どこにもいかないから……」
『今はまだ』、とは、泣きじゃくる少女を前にして言えなかった。ヘロヘロは喉元にまでせり上がった言葉を飲み込み、震えるリュビの頭をなでる。ぐずぐずというすすり泣きは徐々に収まり、やがてすがる手が離される。

――ふと、ホワイトブリムの言葉が脳裏をよぎる。

「……誠心誠意、応えろ……かぁ」

少なくとも、自分が帰るその時までは彼女たちに応えてもいいのではないか。

「こんなふうに言われたら、応えるしか、ないよな」

自分が何をしたのか気付いたのか、顔まで真っ赤になったリュビの頭に、触腕を乗せる。

まだこの世界で生きる勇気はないけれども、彼女たちを造った者として……

「ご主人様にくらい、なってやるよ」